

ケ月に二三圓しか儲けられない母は病気で仕事が出来なかつた。それから子供が二人、一六つと八つの男の子があつた。そして此人達は、鳥取は「外から来た」人達であつた。ある冬の日、父が病んだ。一週間苦んだあとで死んで葬られた。それから長い間床について居た母は、彼のあつたところを追ふた。そして子供等だけになつた。助けて貰ひに行く人を誰も知らなかつた。そして生きるために何でも賣られるものを賣り始めた。

澤山はなかつた。死んだ父と母の着物、それから彼等自身の着物の大部分、木綿のふさん、それから僅かな哀れな道具類―火鉢、椀、茶碗、それから外のツマラぬものなど。

毎日何か賣つて、仕舞に一枚のふさんの外何もなくなつた。それから何も喰へるものがなくなつた日、父が来た。そ

れから家賃が拂つてなかつた。

恐るべき大寒が来た。そして雪が其日余り高く積つたので、小さい家から遠く離れて出て行かれなかつた。それで一枚の蒲團の下にねて、一緒にふるへて、子供らしくお互に慰め合ふより外に仕方がなかつた。

「兄さん寒からう。」

「お前寒からう。」

火がなかつた。火をつくる材料も何もなかつた。そして暗くなつた。それから氷のやうな風が小さい家へ悲鳴をあげて入つて来た。

彼等は風を恐れたが、家主をもつと恐れた。その家主は屋賃を取立てに荒々しく彼等を引起した。彼は悪相をした無常の男であつた。そして拂ふ可き人が居ないのを見